

# 日本語教育経験のない母語話者の 情報とり方略に非母語話者との 接触経験が及ぼす影響

柳田直美

## ◆要旨

日本に住む外国人は210万人を超え、共生社会実現のためには、母語話者側の言語的歩み寄りも不可欠である。しかし、日本語教育の知識を持たない母語話者が接触経験を経て形成するコミュニケーション方略の実態の解明は未だ不十分である。そこで本稿は、日本語教育の知識や経験のない母語話者の接触経験の多寡に着目し、情報を受け取る場面における母語話者のコミュニケーション方略を分析した。その結果、接触経験の多い母語話者は、(1) 意識的にあいづちを多用すること、(2) 理解表明と理解あいづちを併用すること、(3) 繰り返し、情報内容の確認を行うこと、(4) 非母語話者の発話困難を察知して積極的に援助を行うこと、の4点が明らかになった。同時に、(1) (2) (3) の方略については非母語話者からもその使用が認識されていたことが明らかになった。

## ◆キーワード

接触経験、コミュニケーション方略、  
情報とり方略、非母語話者からの評価

## ◆ABSTRACT

It is not clarified enough that communication strategies which are used by Japanese native speakers without experiences of Japanese language education. In this paper, I analyze some of the differences in communication strategies for taking information between native speakers who have experience in contact situations and those who do not have such experience. The results show that native speakers who have experience in contact situations use information taking strategies as follows: (1) they use a lot of AIDUCHI (back channels). (2) They use both comprehension expressions and comprehension AIDUCHI. (3) They repeat confirming contents of the information. (4) They are sensitive to difficulties in speaking of non-native speakers; they are willing to help them. Strategies (1)–(3) are recognized by non-native speakers.

## ◆KEY WORDS

experiences in contact situations, communication strategies, communication strategies for taking information, evaluation by non-native speakers

## The Influence of Experience in Contact Situations on Japanese Native Speakers' Strategies for Taking Information without Experiences of Japanese Language Education

NAOMI YANAGIDA

## 1 はじめに

現在、日本に住む外国人は210万人を超え（2009年法務省統計）、外国人看護師・介護福祉士、留学生30万人計画など、今後も日本語を母語としない人々の増加が予想される。また、今後増加見込みの外国人は、労働者として日本社会とかかわる者、学術的な場面での日本語使用を期待される者などであり、従来よりもさらに正確な情報のやりとりが求められるようになると思われる。

外国人との共生へ向けて国としての取り組みも始まっているが、非母語話者に対する日本語学習支援への関心は高まっているものの、身近な非母語話者との意思疎通に困難を抱える母語話者への言語的支援にはほとんど目が向けられていないのが現状である。しかし、共生社会実現のためには、母語話者側の言語的歩み寄りも不可欠であり、そのための支援の必要性も指摘されてきている（松田・前田・佐藤2000、徳永2009など）。

近年指摘されつつある母語話者側への支援では、日本語教育の知見を生かし、語彙や表現面を調整した日本語使用が提唱されている。しかし、日本語教育の知識を持たない母語話者が接触経験を経て形成する、いわば自然習得のような形のコミュニケーション方略の解明は十分とはいえない。だが、母語話者に対する非母語話者とのコミュニケーション支援を進めるためには、母語話者の自然習得的な対非母語話者コミュニケーション方略の解明も必要なのではないだろうか。

そこで本稿は、日本語教育の知識や経験のない母語話者の接触経験の多寡に着目し、母語話者の自然習得的対非母語話者コミュニケーション方略の一端を明らかにすることを目指す。

## 2 先行研究と本研究の目的

接触経験を経て形成するコミュニケーション方略に関して、岡崎（1994）の「共生言語」という概念がある。岡崎は非母語話者だけが日本語を学習するのではなく、母語話者も非母語話者との接触経験を通して共生言語としての日本

語を学習するとしている。もし岡崎の言うように、母語話者が非母語話者との接触経験を通して共生言語を学習していくならば、非母語話者とのインタラクティブな経験が多い母語話者と少ない母語話者では、コミュニケーション方略に違いがあると考えられる。

非母語話者との接触経験が母語話者の言語行動に影響を与える可能性について、村上（1997）は、非母語話者との接触経験が異なる4グループが行う意味交渉の頻度と方法を比較し、その違いを示した。増井（2005）、筒井（2008）なども接触経験による母語話者の言語行動の差を指摘している。

また、一二三（1995）は接触場面において母語話者が行う意識的配慮に、日本語教授経験の差が影響していることを明らかにしている。

これまでの研究によって、接触経験の違いによる日本語母語話者の言語行動の差、意識面の差が明らかになってきているが、従来の研究対象は、日本語教育の知識や教授経験を持つ母語話者を含むものが多く、そのような知識のない母語話者が接触場面で行うコミュニケーション方略の実態が明らかになっていないとは言いがたい。柳田（2010）は、日本語教育経験のない母語話者が情報を提供する場面で用いる「情報やり方略」について、接触経験による違いを分析しているものの、母語話者が情報を受け取る場面の方略についての分析は行っていない。

そこで本稿は、接触場面において母語話者が用いる情報受け取りの方略を「情報とり方略」と呼び、日本語教育に関する知識も経験もない母語話者の情報とり方略に接触経験が及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

## 3 研究方法

### 3.1 調査方法と分析データ

親疎関係の影響を排除するために母語話者・非母語話者の初対面ペアを設定し、双方向性のインフォメーションギャップタスクを実施した。タスクは、短編コメディ「Mr. Bean」（全5分程度）の前・後半部分を別々に視聴し、お互いの持っている情報を、会話を通じて共有し、最後に全体のあらすじを各々が完成

させるというものである。ビデオの前半部分を母語話者に、後半部分を非母語話者に、それぞれ2回ずつ見せ、内容を記憶するように指示した。ビデオ視聴後、まず前半部分を視聴した母語話者が非母語話者に情報を提供した（＝情報やり場面）。次に、ビデオの後半部分を視聴した非母語話者が母語話者に情報を提供した（＝情報とり場面）。この情報のやりとりの場면을録音・録画し、録音・録画終了後、両者に別々に全体のあらすじを書くタスクを課した。タスク終了後、フォローアップアンケート（以下、FUA）を母語話者、非母語話者双方に実施した。

分析データは情報とり場面の母語話者の発話と、タスク終了後に行ったFUAである。FUAは一二三（2002）をもとに作成し、母語話者にはタスク中の自身の言語行動や態度について、非母語話者にはタスク中の母語話者の言語行動や態度についてどのように感じたかを5（そう思う）から1（全然そう思わない）の5段階で評定してもらった。

### 3.2 調査協力者

調査協力者は、接触経験の多い母語話者グループ（以下、NS-E）、接触経験の少ない母語話者グループ（以下、NS-N）、非母語話者グループ（以下、NNS）の3グループである。調査協力者の組み合わせは表1の通りで、1人のNNSがNS-Eの男女各1名とNS-Nの男女各1名、計4名とタスクを行った。NNSのタスクに対する学習効果の影響を抑えるため、タスク実施順序はランダムに設定し、ビデオ作品は4作品を使用した。

接触経験の多い母語話者グループは10名（男女各5名、nsEA～nsEJ）で、全員大学院生である。事前に質問紙調査を行った結果、全員親しい外国人の友人がおり、普段から外国人と日本語で接触する機会が多いと回答した。また、普段の会話は日常会話だけでなく専門などの話題についても、日本語で行うと回答した。一方、接触経験の少ない母語話者グループも10名（男女各5名、nsNA～nsNJ）で、大学生5名、大学院生5名である。NS-Eと同様に事前に質問紙調査を行った結果、全員外国人との日本語での接触経験は、あいさつ以外ほとんどないと回答した。NS-E、NS-Nのいずれも、日本語教育の知識や教授経験はない。

NS-E、NS-Nと会話録音調査を行う非母語話者グループは5名で、母語はタ

イ語、ロシア語、中国語、韓国語、朝鮮語である。全員女性で、日本語能力試験1級が4名、2級が1名で、日本滞在歴は全員10カ月以下であった。

表1 調査協力者の組み合わせ

NNS		NS-E		NS-N	
		nnsA	→	nsEA (女)	nsEB (男)
nnsB	→	nsEC (女)	nsED (男)	nsNC (女)	nsND (男)
nnsC	→	nsEE (女)	nsEF (男)	nsNE (女)	nsNF (男)
nnsD	→	nsEG (女)	nsEH (男)	nsNG (女)	nsNH (男)
nnsE	→	nsEI (女)	nsEJ (男)	nsNI (女)	nsNJ (男)

### 3.3 分析の枠組み

一二三（2002）は、接触場面の発話カテゴリーを情報の共有、情報の合成・加工、相槌、無反応の4つに分類した。柳田（2009）は接触場面の会話データをもとに、一二三（2002）が設定した接触場面の発話カテゴリーを情報の共有に特化して修正している。そして、接触場面の母語話者発話に現れる発話カテゴリーを、母語話者が情報を提供する「情報やり場面」と、母語話者が情報を受け取る「情報とり場面」とに分けて設定した。本稿では、情報共有の過程に焦点をあて、母語話者が非母語話者から情報を受け取る「情報とり場面」において、母語話者が使用する発話カテゴリー（柳田2009）（表2）を分析の枠組みとして利用する。

表2 情報とり場面の発話カテゴリー

情報要求
共有表明
あいづち
非母語話者に対する理解表明発話
意味交渉
母語話者自身の理解促進発話
非母語話者に対する援助発話

## 4 結果と考察

情報とり場面の母語話者の発話を分析した結果、NS-E・NS-N間で「共有表明」と「意味交渉」の 카테고リーに差が見られた。以下、分析の結果を述べる。

### 4.1 共有表明

#### 4.1.1 あいづち

Scarcella & Higa (1981) は非母語話者の会話支援方略の1つとして、“right”, “yeah”, “uhuh”などの「肯定的フィードバック」を挙げている。また、佐々木(2006)は、異文化状況では、母語話者が非母語話者に情報を要求し、それに対して非母語話者が情報を提供する際に、「途中あいづち」が有意に多かったとし、これは母語話者が非母語話者の発話を奨励するためだとしている。

堀口(1997)は、あいづちを「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」としている。本稿のあいづちの定義もこれに準じるが、いわゆる「あいづち詞」を使用した発話に限定して分析した。以下に例を示す。

#### 会話例1: あいづち

- nnsB そう、ひらめき、そういう感じでこう、ああっ、それでペンを取ってー、  
 → nsED うん  
 nnsB わざと、  
 → nsED あ、/なるほど/

両グループのあいづちの出現数を集計した結果、NS-Eは平均48.8発話、NS-Nは平均27.5発話であった。この結果についてウィルコクソンの順位和検定<sup>[註1]</sup>を行ったところ、5%水準で有意差が認められた(表3)。このことから、NS-Eがあいづちを多用していたことがわかる。

表3 あいづち (NS-E/NS-N) : ウィルコクソンの順位和検定

	NS-E 平均 (標準偏差)	NS-N 平均 (標準偏差)	Z値
あいづち	48.8 (23.9)	27.5 (11.4)	-2.07*

ns: not significant, † p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01 n=10

NS-Eが多用したあいづちについて、さらに詳しく観察する。あいづちには「概念的あいづち」(そうですか、なるほど、本当、など)と、「感声的あいづち」(ええ、はい、うん、など)がある(小宮1986)。「概念的あいづち」は相手が伝えようとしている内容がわかっていないと打てない、つまり、理解を明示的に示すあいづちである。本稿ではこのような、理解を明示的に示すあいづちを「理解あいづち」と呼ぶこととする。

「理解あいづち」について、出現数を集計した結果、NS-Eは平均2.7発話、NS-Nは平均0.8発話であった。この結果についてウィルコクソンの順位和検定を行ったところ、5%水準で有意差が認められた(表4)。

このことから、情報とり場面におけるNS-Eの特徴として、あいづちを多用することと、「理解あいづち」を多用することが明らかになった。

表4 理解あいづち (NS-E/NS-N) : ウィルコクソンの順位和検定

	NS-E 平均 (標準偏差)	NS-N 平均 (標準偏差)	Z値
理解あいづち	2.7 (3.0)	0.8 (1.2)	-2.17*

ns: not significant, † p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01 n=10

では、あいづち使用に対して、両グループに意識の差はあるのだろうか。母語話者に対するFUAの「相手(NNS)の話の聞いていることを示すために、うなずいたり、あいづちを多くした」の5段階評定の結果について、t検定を行ったところ、表5のようになり、有意傾向が認められた。この結果から、NS-Eの方があいづちを意識的に行う傾向があることが明らかになった。

表5 あいづちに対する意識 (NS-E/NS-N) : t検定

	NS-E 平均 (標準偏差)	NS-N 平均 (標準偏差)	t値
相手の話を聞いていることを示すためにうなずいたりあいづちを多くした	4.6 (0.52)	4.1 (0.74)	1.76 †

ns: not significant, † p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01 n=10

以上の結果から、NNSとの情報とり場面において、接触経験の多いNS-Eは意識的にあいづちを多用する傾向があるといえる。

#### 4.1.2 非母語話者に対する理解表明発話

次に、非母語話者に対する理解表明発話（以下、「理解表明」）について両グループを分析する。

理解表明は「わかりました」「大丈夫です」などの発話で、あいづちと同じように話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現であり、しかもその積極性はあいづちよりも強い（柳田2009）。

理解表明の発話を集計したところ、NS-Eが平均1.4発話、NS-Nが平均0.8発話で、両者に有意な差は見られなかった。

一方、理解あいづちと理解表明の使用分布を集計したところ、両グループに違いが見られた。理解あいづちと理解表明の出現数を協力者別に集計した結果（表6）、①併用する、②いずれかを使用する、③不使用という3つのタイプが見られた。その結果をまとめたものを表7に示す。

理解あいづちや理解表明は、提供された情報に対して、理解したことを示す発話である。そのため、聞いていることを示すあいづちなどと比べ、会話中での出現数はそれほど多くないと思われる。そのため、ここでは理解あいづちや理解表明を行ったか行わなかったか、つまり、理解を示す発話の出現の有無が問題になる。

表7から、NS-Nは、2名を除いて8名が、理解あいづちと理解表明を相互補完的に使用しているが、両者を併用する者はいなかったことがわかる。一方、NS-Eは10名中5名が理解あいづちと理解表明のいずれかを使用し、残り5名は両者を併用している。このことから、NS-EはNS-Nに比べ、積極的に理解を

表6 理解あいづちと理解表明の出現数

	NS-E		NS-N		
	理あ	理表	理あ	理表	理表
nsEA	1	1	nsNA	0	0
nsEB	7	1	nsNB	1	0
nsEC	0	2	nsNC	0	0
nsED	2	5	nsND	0	1
nsEE	1	1	nsNE	1	0
nsEF	0	3	nsNF	1	0
nsEG	7	0	nsNG	1	0
nsEH	1	1	nsNH	0	2
nsEI	1	0	nsNI	0	2
nsEJ	7	0	nsNJ	0	3

理あ：理解あいづち／理表：理解表明

表7 理解あいづちと理解表明の使用分布

	①	②	③
NS-E	5名 (50%)	5名 (50%)	0名 (0%)
NS-N	0名 (0%)	8名 (80%)	2名 (20%)

理解あいづちと理解表明を①併用、②いずれか使用、③不使用

示そうとしていたと考えられる。

## 4.2 意味交渉

### 4.2.1 母語話者自身の理解促進発話：確認チェック

次に、意味交渉のカテゴリーの母語話者自身の理解促進発話のうち、「確認チェック」について分析する。

「確認チェック」はLong (1983) の「トラブルが起きた場合に談話を修復するためのタクティクス」に含まれている。接触場面で母語話者が用いる確認チェックについて、柳田 (2009) は先行研究をふまえ、「話し手の発話を聞き手が正しく理解しているかどうか、聞き手自身が話し手に確認する発話。話し手の発話があいまいであったものを聞き手自身が言うことによって、あるいは質問

形式で確認したり、聞き手が話し手の発話の全部、または一部をくり返したりして、話し手の発話に対する自分の理解を確認する」と定義しており、本稿もこれに従う。次のような例である。

#### 会話例2：確認チェック

nnsB そう思って、だからもう{笑いながら}、下からー /ん/  
 → nsND //下?//  
 nnsB ほ、下、うんうん

確認チェックの出現数を比較した結果、NS-Eが平均16.7発話、NS-Nが平均11.0発話で、NS-EとNS-Nに有意な差は見られなかった。しかし、NS-EとNS-Nの一連の発話を観察したところ、確認チェックの中には、会話例2のようにNNSからの情報提供の途中で短い発話内容について確認する確認チェックだけでなく、会話例3のようにNNSから情報を受け取った後に、まとまった情報の単位で内容を確認する確認チェックが観察された。

そこで、本稿では後者を「情報単位確認チェック」として両グループを比較する。情報単位確認チェックの分析にあたり、ビデオ作品内の出来事を一定の行為ごとにそれぞれ区切り、さらに会話資料の観察を行って修正したものを「情報単位」<sup>[註2]</sup>として利用する。

以下に、情報単位確認チェックの例を示す。会話例3は、nnsDの情報提供の終了を受けて、nsNHがそれまでの情報内容を要約して確認を行っている部分である。

#### 会話例3：情報単位確認チェック

nsNH そ、結局なんも、できなかった、ビーンは  
 nnsD うん、はい、で最後、結局、泣いてしまって  
 nsNH あ泣いちゃった {笑いながら}  
 nnsD はい、が、つくえにつつぶしながらー、泣いて、マーマーと泣いて  
 nsNH ああー  
 nnsD うん、はい、終わりました

→ nsNH じゃあ、作戦的には3つ?、/4つ/...  
 nnsD //うん//あはい4つ  
 → nsNH 隣寄って、  
 nnsD はい  
 → nsNH あと、そらしてる間とっちゃうのと、フーって紙吹いたのと、あと一鉛筆を落として/って/  
 nnsD //あはい//、そうです

情報単位ごとの「情報単位確認チェック」出現の有無を調査協力者別に分析したところ、情報単位全てに対して確認チェックを行っていたNS-Eは10名中6名、NS-Nは2名のみであった(表8)。

表8 情報単位確認チェックの使用分布

	情報単位全て	情報単位一部/なし
NS-E	6名 (60%)	4名 (40%)
NS-N	2名 (20%)	8名 (80%)

表8の結果について直接確率計算を行ったところ、偏りに有意傾向が認められた(p=0.085)。このことから、接触経験の多いNS-Eと情報単位全てに対する情報単位確認チェックには、関連性があると考えられる。つまり、接触経験の多いNS-Eは、NNSから情報を一通り受け取った後も、正確な情報を得るために繰り返し、情報内容の確認を行っているといえる。

#### 4.2.2 非母語話者への援助発話

宇佐美(2001)は、複数の話者によって完結される1つの文を「共同発話」とし、接触場面における共同発話では、非母語話者が言い淀んでいるところを母語話者が助ける形が多いと指摘している。本稿では、「共同発話」を、「聞き手が話し手の意図を汲み取り、相手の発話を引き取って代わりに発話して完成させ(ようとす)る発話」とし、非母語話者からの援助要求の度合い別に母語話者の共同発話を分類した。共同発話の例と、援助要求の度合いの分類を以下に示す。

会話例4：共同発話

nnsC お医者さん、歯医者さんがー、準備をしているあい、とき、間にー、  
/あ、ミスターピーンは/  
→ nsEE //うん、いろいろ遊んでいる//  
nnsC はいー、遊ん、でいて、

援助要求の度合いの分類

- (1) 援助要求度高：「何と言うんですか」など、NNSから発話困難が明確に提示される。
- (2) 援助要求度中：「なんか」や確認を求める上昇イントネーション、言い淀み、沈黙などによって非母語話者から発話困難と思われる状態が提示される。
- (3) 援助要求なし：援助要求発話がない状態で、母語話者が非母語話者の発話を引き取って完成させようとする。

非母語話者からの援助要求度高は、非母語話者がはっきりと自身の発話困難を示している。援助要求度中は、その度合いが低くなり、発話困難を抱えているかどうか明示的ではなくなる。また、援助要求がない場合の共同発話は、非母語話者への援助というよりも、「先取り発話」(堀口1997)によって相手への理解・共感・一体感(田中1998)を示すものであると考えられる。

NNSからの援助要求の度合い別に共同発話の出現数を比較したところ、表9のようになった。

表9 援助要求の度合い別共同発話の出現数

	高	中	なし
NS-E	14 (18.9%)	50 (67.6%)	10 (13.5%)
NS-N	10 (25.6%)	18 (46.2%)	11 (28.2%)

この結果について $\chi^2$ 二乗検定を行った結果、有意な偏りが見られた( $\chi^2(2) = 5.456, p < 0.05$ )。そこで、残差分析を行ったところ、高程度では偏りに有意差は

なかったが、中程度でNS-Eが有意に多く、援助要求なしではNS-Nが多い傾向が見られた。

この結果から、まず、NS-EもNS-Nも、NNSからの援助要求の度合いが高い場合、共同発話によるNNS援助には差がないといえる。次に、中程度の援助要求においては、NS-Eの方がNNSに対して積極的に共同発話を行うことがわかった。つまり、NS-Eは、NNSからの援助要求が明確でない場合でも、NNSの発話困難を察知して積極的に援助を行っていると考えられる。さらに、援助要求なしにおいてはNS-Nの共同発話の方が多い傾向があった。よって、NS-Nは共同発話を、援助要求に応じるというよりも相手への理解・共感・一体感を示すための手段として利用している可能性がある。

## 5 NNSのNS-E、NS-Nに対する意識

ここまで、情報とり場面における母語話者の言語行動について分析してきたが、会話相手であり、情報提供者でもある非母語話者は母語話者に対してどう感じていたのだろうか。そこで、本節では、NNSが、接触経験の多いNS-E、接触経験の少ないNS-Nに対してどのような意識を持っていたかをフォローアップアンケート(FUA)から明らかにする。

NNSに対するFUAのうち、4.で分析した言語行動に関連する項目の5段階評価の結果について、t検定を行った。表10に示す。

表10 NNSの情報とり方略に対する意識(NNS：対NS-E/対NS-N)：t検定

	対NS-E 平均(標準偏差)	対NS-N 平均(標準偏差)	t値
あいづちが多かった	4.3 (0.82)	3.7 (0.95)	1.51ns
あなたの話を最後までよく聞いた	4.9 (0.32)	4.4 (0.70)	2.06†
あなたの話がわかっていなかった	1.5 (0.53)	2.2 (0.63)	-2.69**
あなたの言葉をくりかえしたり まとめたりした	4.4 (0.70)	3.1 (1.10)	3.15*
あなたがこまったとき、助けた	4.6 (0.70)	3.9 (1.20)	1.60ns

ns: not significant, † p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01 n=10

4.1.1では、NS-Eがあいづちを意識的に多用していたことが明らかになったが、あいづちはタイミングやイントネーションによっては、相手の話の流れをさえぎる結果になってしまうこともある(堀口1997)。しかし、FUAの結果において「あいづちが多かった」の結果に有意差がなかったことから、NNSは2グループのあいづちの量に関して違いを感じていなかったこと、また、「あなたの話を最後までよく聞いた」でNS-Eの方が評定値が高い傾向が見られたことから、NNSはNS-Eのあいづちによって、話の流れをさえぎられたと感じてはいなかったといえる。

次に、「あなたの話がわかっていなかった」の評定値はNS-Nの方が高かった。このことから、NNSはNS-Nに対して、「本当に私の話をわかっているのだろうか」という不安を感じていた可能性がある。この結果には、NS-Nのあいづち、特に理解あいづちの少なさや、理解表明と理解あいづちの併用がなかったことが影響していると思われる。一方、この結果からNS-Eのあいづちや理解表明は有効に働いていたと考えられる。

また、「あなたの言葉をくりかえしたりまとめたりした」の評定値はNS-Eの方が高かった。NS-EとNS-Nの確認チェック自体の出現数には差がなかったことから、この結果にはNS-Eが、情報を一通り受け取ったあと、再度確認のために行った情報単位確認チェックが影響していると思われる。

ただ、「あなたがこまったとき、助けた」では対NS-E、対NS-Nで差が見られなかった。このことから、NS-Eは積極的に援助を行っていたが、NS-Eの援助はNNSにとっては有効に働いていなかった、もしくは意識されていなかったといえるのではないだろうか。

## 6 まとめと今後の課題

以上、接触場面の情報とり場面において、母語話者の情報とり方略に接触経験が及ぼす影響を分析してきた。分析の結果、接触経験の多い母語話者は、(1) 意識的にあいづちを多用する、(2) 理解表明と理解あいづちを併用する、(3) 正確な情報を得るために繰り返し、情報内容の確認を行う、(4) 非母語話者の発話困難を察知して積極的に援助を行うという4つの情報とり方略を用い

ていることが明らかになった。同時に質問紙調査の結果から、(4)を除いた(1)(2)(3)の方略については非母語話者もそれらの方略の使用を認識していることが示された。

以上の結果から、母語話者が情報を提供する際に用いられる「情報やり方略」(柳田2010)だけでなく、母語話者が情報を受け取る際に用いられる「情報とり方略」についても接触経験が影響していること、かつ非母語話者もその方略の使用を認識していることが明らかになった。

これらの方略は、接触経験を経て母語話者が形成してきたものであり、接触経験の少ない母語話者にとっても接触場面での有効なコミュニケーション方略として提示できると思われる。しかし、方略(4)については非母語話者の認識が確認されなかったことから、この点に関しては、日本語教育の知見の活用を模索していくことが求められるだろう。

今回の調査は、中上級レベルの留学生と大学で学ぶ母語話者との会話を対象としたものであったが、実際に母語話者に対するコミュニケーション支援を行うためには、協力者の非母語話者の日本語レベル・属性、母語話者の属性などを拡充し、検討していく必要がある。

〈早稲田大学〉

### 【文字化凡例】

? : 上昇イントネーション      , : 不自然ではない間      … : 言い淀み  
/ / • // // : 発話の重なり      { } : 非言語行動      — : 伸びる音

### 注

[注1] …… 順序尺度にもとづくデータにも適用可能であるとともに、ノンパラメトリック検定の中では検定力が非常に高く、①外れ値が存在する、②～以上または～以下といった正確な値の得られていないデータがあるため算術平均を求めることができない、③標本の大きさが小さく、分布の正規性が保証されない、などの場合にt検定の代用となる(森・吉田1990)。

[注2] …… 4作品の情報単位数は前後半合わせて、それぞれ9、7、8、13であった。

## 参考文献

- 宇佐美まゆみ (2001) 「会話における「協調的行動」—ボライトネスの観点から」『2001年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp.163-168. 日本語教育学会
- 岡崎敏雄 (1994) 「コミュニティにおける言語的共生化の一環としての日本語の国際化—日本人と外国人の日本語—」『日本語学』13, pp.60-73.
- 小宮千鶴子 (1986) 「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺」『語学教育研究論叢』3, pp.43-62. 大東文化大学語学教育研究所
- 佐々木由美 (2006) 『異文化間コミュニケーションにおける相互作用管理方略—文化スキーマ分析のアプローチ』風間書房
- 田中妙子 (1998) 「会話における〈先取り〉について」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』10, pp.17-40. 早稲田大学日本語研究教育センター
- 筒井千絵 (2008) 「フォロナー・トークの実際—非母語話者との接触度による言語調整ストラテジーの相違—」『一橋大学留学生センター紀要』11, pp.79-95. 一橋大学留学生センター
- 徳永あかね (2009) 「多文化共生社会で期待される母語話者の日本語運用力—研究の動向と今後の課題について」『神田外語大学紀要』21, pp.111-129. 神田外語大学
- 一二三朋子 (1995) 「母国語話者と非母国語話者との会話における母国語話者の意識的配慮の検討」『教育心理学研究』43(3), pp.277-286. 日本教育心理学会
- 一二三朋子 (2002) 『接触場面における共生的学習の可能性—意識面と発話内容面からの考察—』風間書房
- 法務省 (2010) 「2009年法務省統計 国籍 (出身地) 別在留資格 (在留目的) 別外国人登録者」 <<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001065021>> (2010年11月3日)
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 増井展子 (2005) 「接触経験によって日本語母語話者の修復的調整に生じる変化—共生言語学習の視点から—」『筑波大学地域研究』25, pp.1-18. 筑波大学地域研究研究科
- 松田陽子・前田理佳子・佐藤和之 (2000) 「災害時の外国人に対する情報提供のための日本語表現とその有効性に関する試論」『日本語科学』7, pp.145-159. 国立国語研究所
- 村上かおり (1997) 「日本語母語話者の「意味交渉」に非母語話者との接触経験が及ぼす影響—母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて—」『世界の日本語教育』7, pp.137-155. 国際交流基金
- 森敏昭・吉田寿夫 (編) (1990) 『心理学のためのデータ解析テクニカルブック』北大路書房
- 柳田直美 (2009) 「接触場面における母語話者の情報やりとりの特徴の記述—情報やりとりの発話カテゴリーの設定に向けて—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』24, pp.51-68. 筑波大学留学生センター
- 柳田直美 (2010) 「非母語話者との接触場面において母語話者の情報やりとりに接触経験が及ぼす影響—母語話者への日本語教育支援を目指して—」『日本語教育』145, pp.49-60. 日本語教育学会
- Long, M. (1983) Native speaker / non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input. *Applied Linguistics*, 4, pp.126-141.
- Scarcella, R., & Higa, C. (1981) Input, negotiation, and age differences in second language acquisition. *Language Learning*, 31(2), pp.409-434.